

四万十ヒノキを使った 「鳴子」の製作

技術分野 A 材料と加工に関する技術

～地域に根ざした材料を活かし 学ぶ意欲を高める製作教材の紹介～

高知県の取り組み

1. はじめに

高知県は、県の面積における森林の割合が8割を超える森林王国であるが生徒達は木とふれあう機会が少なく知識も少ない。そこで間伐材を使った作品で生徒達が興味や意欲をもって取り組む題材を考えた。幸い、高知県西部には、加工のしやすさ、香りの良さ、美しさなど他の木材との違いを体感できる「四万十ヒノキ」というブランドがあり、これを材料に作品を考えた。

作品としては、木材加工の基本である、のこぎり引き・穴あけ・釘打ちなどができる小箱製作や本立てなどをメインにしたが、製作をしていく中で、音の響きも優れていることに気づき、四万十ブランド以上に高知から全国発信している「よさこい祭り」の鳴子も教材として使えば、地場産のものづくりとして意欲が高まると考え、製作を行った。

2. 鳴子の製作について

(1) しゃもじの切断

環境問題を学ぶ中で、間伐材の有効活用を考えたの



で、「四万十ヒノキ」を一枚の板から「しゃもじ」型に無駄なくけがきを行い、糸のこ盤を使用して切断を行った。



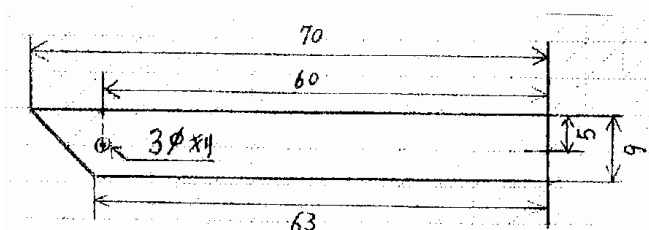
(2) ばちと止め木の切断・穴あけ

「しゃもじ」型に切断したあとは、ばちの部分と止め木を切断する。ばちは全部で12本、それぞれに3mmの穴をあけ、止め木は全部で4個、それぞれに2mmの穴をあける。製作する学校によってばちに色を塗ったり、頻繁に行事などで鳴子を使用する場合は、ばちが壊れた際に簡単に取り外しが可能なように、4個ある止め木のうち、2個に2mmの穴を貫通させることで、修繕が楽にできる工夫も行うことができる。

ばちが、しゃもじと当たる時に発生する音が、鳴子の一番大切な要素となるため、ばちとしゃもじの開きの角度を45度と決め、ばちの製作方法は本校では次のやり方で行った。

- ① のこぎりを使用・・・治具を用いて切断。時間的に早いですが、何度も作業を行った際、治具の交換が必要になる場合もある。

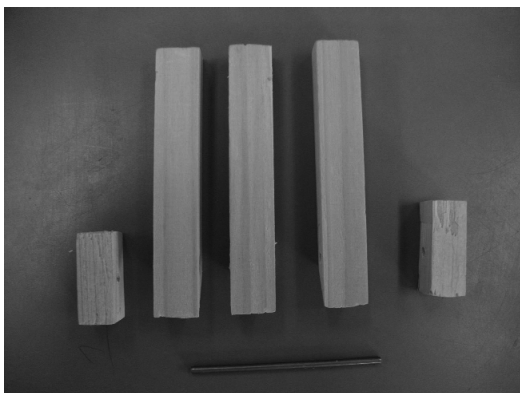
- ② 木工用ヤスリを使用・・・時間はかかるが、確実に角度がそろう。



(3) ヤスリ作業と組み立て

それぞれのパーツが切断できたら、丁寧に紙ヤスリで磨いていく。特にしゃもじの部分については、丁寧に磨いておかないと、鳴子を持ってヨサコイを踊る際に、手が痛くなり負担が大きくなる。

止めるピンは、加工のしやすさから真鍮を使用した。この長さもばちと止め木を固定(44 mm)するのか、交換できる構造(47 mm)にするかで、学校によって調整できる。



切断・ヤスリ・穴あけ・組み立ての加工を行い、ばちの開き具合を調整し、音の響きを確認できたら、上記の写真のばちとしゃもじを木工用ボンドで接着する。



(組み立ての様子)

3. 研究成果と課題

よさこい祭りに使用する鳴子を製作した後の使われ方であるが、高知県内の学校によっても様々である。

一部の学校では、実際に自分たちが製作した鳴子で、よさこい祭りに参加したり、体育祭で使用したりしているが、それ以外は観賞用になったりしている。実際に、どう使われるかによって、製作方法や生徒の意欲も違ってくる。



ただ、高知県から始まった「よさこい」が全国各地に広がり、その道具である「鳴子」の構造を知ること、地元高知の者でもあまり機会がなく、やり方によっては、着色やしゃもじの形を変えたりといろいろな応用ができる面白い教材である。



作業工程の中で、一番大切なところは、バチの角度であった。この角度によって、バチの開きや音の響きが異なる。失敗する例としては、角度がずれたり、まっすぐ切断しなくてはならないところが、曲がったりして、穴あけや、接合でやり直しが発生した。

最終的に、鳴子のバチ・しゃもじ・止め木との調整で、きれいな音とバチの開きを確認できたときは、どの子にも達成感を持たせることができた。鳴子を鳴らし踊りを創作できるのが「よさこい」の良さで、それが受けて全国に広まりつつあるが、鳴子の製作も高知から全国に広がればさらなる創作の鳴子が登場するのではないだろうか。